

18 日本研究の先駆者：レオン・ド・ロニー

レオン・ド・ロニー（1837-1914）は、1852年から東洋言語特別学校（Ecole spéciale des langues orientales）（現在のフランス国立東洋言語文化学院（INALCO）の前身）で中国語を学び、最初は中国語の勉強に没頭しました。教授に日本語の研究を勧められたことがきっかけで、独学で日本語を学び始めました。ロニーは、「日本語研究に必要な主要な知識の概要」（1854年）と「日本語研究入門」（1856年）を出版し、ヨーロッパで初めて包括的に日本語を紹介しました。



Léon de ROSNY

レオン・ド・ロニー

その後、ロニーは、福沢諭吉が参加した文久遣欧使節が1862年にフランスを訪問したときには、通訳を務めるほどの日本語力を身につけていました。1863年には、母校・東洋言語特別学校に日本語講座が開講した際、講師に就任しました。後に教授に昇任し、1907年に退職するまで日本語を教え続けました。日本語に関する資料が少ない時代に日本を一度も訪れることなく、フランスにおける日本学や日本語研究の発展に尽力しました。

1863年に日本語講座が開講したときの講演録が、フランス国立図書館に残されています。ロニーは、日本の魅力と日本語を学ぶ将来性について、学生たちに次のように語りました。

「今日、東洋の国々の中でエネルギーで活力に満ち、未来に向かって自らの意思で勢いよく前進しているのは日本だけです。外国の圧力を受けずに、ヨーロッパ人が実現した大きな進歩を取り入れようとしているのは、日本人だけです。文句を言わず、休むことなく、ヨーロッパに追い付こうと努力しているのは、日本人だけです。」

「このように優れた性質を持つ日本人に対してヨーロッパ諸国が持つ政治や貿易における関心は、日々急速に増すばかりです。ですから、日本語を研究することは、間違いなく好機で将来性があります。」

19世紀と21世紀では、国際情勢は異なります。しかし、ロニーの言葉から、いつの時代でも外国に関心を持ち、異なる言葉や文化を学ぶ必要があることを教えられます。

掲載日：2022年9月5日